



不知火海・球磨川流域圏学会

NEWS LETTER

平成 30 年度 第 2 回現地見学会報告
私と川と流域圏学会
インドネシア共和国訪問紀
新会員紹介
那須良輔没後 30 年
平成 31 年度大会案内

時松雅史
柳原哲郎
濱 茂久
森田仁徳
上村雄一
つる祥子



26

2019年3月20日発行

平成 30 年度 第 2 回現地見学会で訪れた市房山キャンプ場で参加者全員の集合写真

平成30年度第2回

現地見学会記録

熊本高等専門学校 時松雅史

10月21日(日)、平成30年度第2回目の現地見学会が球磨郡水上村で行われた。参加者は17名で、当日は、湯前駅の東側にある湯前まんが美術館(那須良輔記念館)に現地集合した。

私と大和田夫妻、坂井氏、斎藤氏は9時10分ごろには着いたため、一足先にまんが美術館を見学した。この美術館には湯前町出身の漫画家である故那須良輔の作品が常設展示されているが、特に目を引いたのは米ソ対立や核実験等に対する風刺画である。この施設では風刺漫画のコンテストも開催しており、駐車場横にはいくつかのユーモアあふれる作品が紹介されていた。



集合時間の10時過ぎには参加予定者全員が集まり、堤先生からこの日のスケジュールに

ついて説明がなされた。その後、11時に水上村の市房山キャンプ場に到着、我々は2時間コースのトレッキングを体験することとなった。このトレッキングは、森林セラピー、つまり森の自然が彩なす風景や香り、音色、肌触りなど森の生命力を五感で感じることによって心身に元気を取り戻させようとする効果があると言われている。森の中のマイナスイオンは副交感神経に作用して、体をリラックスさせるといわれているため、仕事で強いストレスを抱えた人にとっては最適である。我々は、3つのグループに分かれて、1グループに1名、ガイド(通称森の案内人)がついて、コースを



案内してくれた。私のグループのガイドは岩井田さんという方で、生まれは鹿児島県であるが、奥さんが湯前町出身という縁もあって、今は湯前町で暮ら



しているという。

はじめに祓川橋を渡り、市房山(1,722m)の登山口にある

登山者記録箱のところで登山についての説明がなされた。登山道(参道)を登っていくと、市房杉が大きく見えてきた。市房杉は幹回り6m以上で、現在20本ほど残っており、それぞれの木には幹回りの長さの順位が表示されている、杉はこの先の市房神宮に行くための道しるべとなっているという。ガイドの岩井田さんから、杉の幹回りとはどこを計測しての長さなのかについて、杉上手側の地面から1.3mのところを計測すると説明してくれた。

しばらく歩くと今度は、鳥居が見えてきた。ここで岩井田さんから、神宮は皇室との関係が



神社よりも深いこと、この先にある市房山神宮は霧島神宮の祭神を分祀していること、さらに縁結びの神様であることを説明してくれた。ほかに鳥居の屋根の部分に当たる笠木のところにシンシンランという植物が生えているので、よく見て覚えておくようにとの話がなされた。さらに登っていくと、夫婦杉の切り株があり、台風で倒れたものであるが、25年前に競りで男杉7,000万円、女杉5,000万円で落札されたという。杉の用途としては、薄く切って張り付けるのに使うそうである。基本的に利益目的

で切ることはなく、自然災害で倒れたものを売りに出すという話である。ただ、例外があって、皇居に献上された杉については県庁の許可を取って伐採したのだという。切るときは、杉の上部から6mのところまで切って、また6mと、この間隔で切っていくのだという。



またしばらく進むと、きれいな川があり、先に出発した2つのグループが河原で食事をと

っていた。我々もお腹がすいたのでいっしょに食事をとった。昼食は、水上村にある株式会社みずかみで作ったセラピー弁当である。品書きには、三色おにぎり・煮しめ・かぼちゃもち・魚甘露煮・野菜天ぷら・玉子焼き・鹿カツ・甘味とあり、大変おいしかった。弁当箱

もきれいに洗えば、何回か使えるということであった。



トレッキ

ングの往路はここまでで、今回は時間の関係で、市房山神宮までは行かずに引き返した。途中で幹回りの大きな杉の前で、記念写真を撮り、それから車道に出て、ゆっくりと下り坂を歩いた。この日は天気が良く、山のススキがきらきらと輝いてとてもきれいであった。最初の登山口のところまで来ると、ガイドの岩井田さんから、絶滅の危機に瀕しているというゴイシツバメシジミというチョウについて説明がなされた。このチョウの幼虫は、先ほど鳥居の上部に生えていたシンシンランを食べているとのことであった。このため水上村では、チョウを密猟か

ら守ると同時に、エサとなるシンシンランの保護も行っているのである。祓川橋たもとにある木には人工的にシンシンランが植えられていた。ようやく、トレッキングを終え、3名のガイドの方にお礼を述べると、我々はキャンプ場を後にした。

次の目的地である猫寺を訪問するまでは少し時間があるということで、市房ダム湖のほりにある物産館で買い物をするなど休憩をとった。休憩後、予定通り、湯前町に近い所にある千光山生善院、通称猫寺を訪問した。

猫寺と呼ばれる所以は、無実の罪をきせられた息子を想う母の怨念が、夜な夜な



化け猫の姿となって、相良の殿様の寝床に現れ、崇りを恐れた殿様が供養して寺を建立したという、相良の化け猫騒動がもととなっている。この話をこの寺の女性の住職さんから臨場感たっぷりと聴かせていただいた。寺には千寿観音像が祀られ、台座には猫の彫刻があった。また本堂には、猫が描かれている襖もあり、廊下にも大きな化け猫の造り物や猫の土産品もあって、ちょっとした観光地という感じであった。この寺はまた百八霊場九十八番札所となっており、昔から多くの人たちが巡礼に来たのだろう。

今回、会長の堤先生のお計らいで秋晴れの中、水上村をゆっくりと訪ねることができた。キャンプ場のガイドの方々や猫寺の住職さんには大変お世話になった。心からお礼申し上げる次第である。



私と川と流域圏学会

柳原哲郎

「ニュースレターに文章を書いてほしいという話もらったが、何らかの学術研究をしているわけでもなく、自然環境保護の活動をしているわけでもないで、自分がなぜ流域圏学会に参加しているのかということ、川とのかかわりという観点から自己紹介的に書くことにする。



球磨川、二俣の瀬の上流部にて

高校で英語教師をしていた父の勤務が当時人吉高校水上分校だった関係で、生まれたときは奥球磨の水上市に住んでいた。物心がついたころには人吉市のはずれに引っ越した。小学校低学年の時は、近所の田んぼ沿いの湧水の小川で泥んこになって小鮒をとったり、ザリガニをとったりしていた。山と川が身近にあったので、小学2年生のころに図書館で川釣りの本を見つけたときは、夢中になって読んだ。海は身近にはなかったのも、もっぱら川だった。

野田知佑さんの本に触れたのは、たしか小学4年生ころだった。野田さんの本には、やったことない野遊びがたくさん出てきて、いつか川に潜って魚を追っかけてみたいとか、カヌーで川下りをしてみたいと胸を躍らせた。川辺川とダム問題について知ったのもこの時で、川を取り巻く問題や政治について考えるようになった。

家では新聞を複数紙とっていたこともあり、中学生から高校にかけて、時々、ダム問題について考え

たことをまとめて、地元紙の熊本日日新聞や人吉新聞へ投書した。将来のために本当にダムが必要なのか、しっかり考えて判断してほしいと子供の立場から呼びかける内容や、ダムの堆砂問題や環境アセスメントが行われていないという点からダム建設に疑問を投げかける内容だった。ちょうどそのころ、地元では「清流球磨川・川辺川を未来に手渡す会」ができ(後の流域郡市民の会)、顔を出すようになった。その後、毎日新聞の福岡賢正記者による川辺川ダム建設の検証記事が連載され、問題の多いダム建設計画を問題視する流域市民の声も広がっていった。



球磨川ラフティング、球磨村渡で友人と

中学生になると行動範囲も広がり、通学用の自転車で川辺川まで釣りに行ったり、ため池に行ってブラックバスを釣ったりした。また、高校生になると、将来野田さんのようにカヌー旅行をするために、部活で競技カヌー一部に入った。もともとは野田流のんびりカヌーを目指していたので、平水を陸上競技のようにいったりきたりする競技カヌーにすぐにあきてしまって、一時休部したが、数年後の熊本国体を視野にスラロームという種目で再度やってみないかと言われ、その後は高校卒業まで頑張った。

大学進学で大阪に行ってから、川で遊ぶ機会は減ったものの、夏に人吉に帰省した時には、カヌーをしていた縁で、人吉で営業をスタートさせた

ばかりのラフティング会社でアルバイトをした。ラフティングのガイドは夏休みに帰省した時だけだったが、3年ほど取り組む中で、一人でガイドができるようになった。また、夏の長期休暇にはゴムボート式カヌーで四万十川を下ったりもした。

大学では哲学を専攻し、一応、修士課程まで進み「風土」をテーマに拙い論文を書いた。人間は「自然」と向き合う時に、自然科学の観点から向き合うだけではなく、同時に、文化的・歴史的関わりもしているとする考えだ。これは和辻哲郎の「風土」に影響を受けたフランスの地理学者オギュスタン・ベルクの見方だが、なかなか難しく、いまだに未消化のまま。ただ、人間にとっての「自然」は、自然科学的アプローチも必要であると同時に、価値や意味の観点から、文化的・歴史的・哲学的アプローチも必要であるという観点は、自分が流域圏学会の会員でいたい理由とつながっている。研究者や専門家だけでなく、住民・市民も一緒に参加する学会であること、自然科学系だけでなく人文科学系の研究・発表も行われる場所であること、流域圏というとらえ方に関心がある人は誰でも参加できることが流域圏学会の魅力だ。



ヤマメ釣り、山江村の万江川上流部にて

熊本市の企業に就職してからも、カヌーをしたり、川辺川の上流でヤマメを釣りに出かけたり、キャン

プをしたりと、楽しんでいる。そして、川で遊ぶ時にはやっぱり球磨川・川辺川に帰ってくる。熊本だけではなく九州を見渡しても、球磨川・川辺川のような規模で川遊びをできる川はない。ラフティングの営業がこれだけの規模で行われて、福岡や熊本市内から若者がこぞってやってくる川は他にはない。川辺川ダムは法的に中止とはなっていないので、注意しないとイケないが、荒瀬ダムに続いて、瀬戸石ダムや市房ダムも撤去してほしいと思うし、流域全体にダムがない本来の川の姿を見たい。それによって豊かになるであろう八代海の今後も見たいと思う。



宮崎の某河川で大型のテナガエビと

と、ニュースレターに文章を書いてほしいという話を受けて、文章を考えているうちに、東京支社への転勤が決まった。3月からは数年間、家族で東京に暮らすことになる。流域圏学会の総会や現地見学会にはしばらく参加できないかもしれないが、その間、人間の自然とのかかわりについて、河川行政について、東京で見分を広げたいと思う。もちろん川遊びやキャンプもできるだけ楽しみたい。

柳原哲郎、41歳、熊本日日新聞社勤務
(広告営業担当)

インドネシア共和国訪問紀

濱 茂久

1. 「セレモニー (ceremony)」という言葉について

「セレモニー (ceremony)」という言葉聞いて、皆さんは何をイメージするでしょうか。もちろん、人によって持つイメージは異なってくると思います。私の場合、例えば新年一般参賀や、学校の入学式、卒業式といった、おめでたい事を祝うもの、というイメージですが、広辞苑 (第3版、新村 出編) をみると「儀式、式典、礼式」、GENIUS Third Edition をみると「儀式、祭式、式典」と記載されています。2016年7月21日～8月20日まで、約1ヶ月間かけてインドネシア共和国の3島14都市を回った中で、プライベートで最初に行ったのが、スラウェシ島タナトラジャでした。そこで、現地ガイドに「お前はラッキーだ！裕福で、高貴な女性のセレモニーがある。ホテルに荷物を置いて、一緒に行くぞ！」と、連れていかれました。「え、セレモニー？」「セレモニー≡お葬式？」慣れない環境と、長時間のバス移動だった事もあり、何も考える余裕もなく、行動をとるにしました。今回、タナ・トラジャで見た、セレモニーについて、簡単にまとめてみたいと思います。

2. インドネシア共和国及びタナトラジャについて

インドネシア共和国は、東南アジア南部に位置する共和制国家です。首都はジャワ島に位置するジャカルタで、人口は約2.55億人(2015年インドネシア政府統計)。イスラム教87.21%、キリスト教9.87%(プロテスタント6.96%、カトリック2.91%)、ヒンズー教1.69%、仏教0.72%、儒教0.05%、その他0.50%である¹⁾。タナ・トラジャの「タナ」は土地、「トラジャ」は「トラジャ族」の事を指し、スラウェシ島の南スラウェシ州及び西スラウェシ州の山間地に居住するマレー系少数民族のことを指します。タナ・トラジャへは、成田空港よりインドネシア共和国の首都、ジャカルタを経由し、スラウェシ島マカッサル入り後、タナ・トラジャ行きのバスで現地入りしました。

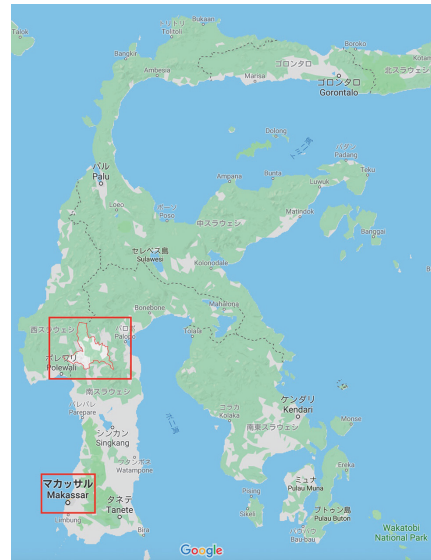


図1 スラウェシ島マカッサルおよびタナ・トラジャの位置関係

3. 「セレモニー (ceremony)」の特徴

特徴として、まず、タバコや砂糖、紅茶等のお供え物を持っていくと、旅行者でも見学をすることが可能であること。私自身、旅行者でしたが、ガイドにタバコ1カートン準備してもらい、2日間参加した。当然のことながら、2日間参加したので、タバコ2カートンとなります。2日目、私が親族らしき女性に渡すと、珈琲とお菓子(写真2)、そして両日とも、食事(写真3)を出していただきました。



写真2 珈琲とお菓子



写真3 食事の一部

次に、セレモニーを開催する為の費用が準備できるまで、セレモニーを開催しないこと。その間、故人を模した副葬人形（写真4）を製作すること。



写真4 副葬人形

そして、私自身、最大の特徴と感じたのが、あえて「お葬式」という言葉を用いるが、楽しいイベントのようであったこと。故人を囲んで歌を歌い、ダンスをする（写真5）。「お前もいってこい！」と背中を押され、半強制的形で、筆者も参加しました（写真6）。



写真5 ダンス風景



写真6 ダンスに参加する筆者

先に、「費用が貯まるまで」と記しましたが、参考文献に「葬式儀礼は遺体処理、副葬人形作成、お墓構築など、何段階にも分かれ、その度に水牛や豚を殺して、村人や参加者に大盤振る舞いをする。」「貴族の葬式となると、何ヶ月にも及び、一回の葬式で生贄にされた水牛が150頭、豚1,000頭、という例も残っている」²⁾と記載のあることから、相当の費用がかかることが考えられます。実際、水牛は5～6頭、豚に関しては50頭以上はいたのではないかと、思います。また、水牛については、バラン（山刀）で喉元を一撃、豚については心臓をひと突、その後、解体し、調理するまでの工程を目にしてきました。

スケジュールの都合上、全てを見てきたわけではありありませんし、英語での会話でしたので、全てを理解してきたわけでもありません。おそらく、その後は現地の風習にのっとったセレモニーが続けられたのでしょう。2日間の間で、副葬人形等の移動、女性に近い親族への挨拶儀礼等、行われていました。



写真7 会場内にいた水牛の一部



写真8 運ばれてくる豚の様子



写真9 式場へ移動する様子



写真11 セレモニーのMC



写真10 近親者の控え室
へ食事などを運ぶ様子

4. 最後に

改めて、「セレモニー」とは、どういう時に使う言葉でしょうか。参考文献2)によると、「お葬式は、人生最大のイベント。」「トラジャでは、生きるより死ぬほうが、お金がかかる」と、タナ・トラジャでは言われるそうです。この地域の、伝統的な文化・風習でしょう。実際に、現地でセレモニーの一部を目にしてきましたが、今後、文献をあたっても、「日本人」として、「日本」の中で生きてきた私には、理解しようと思っ

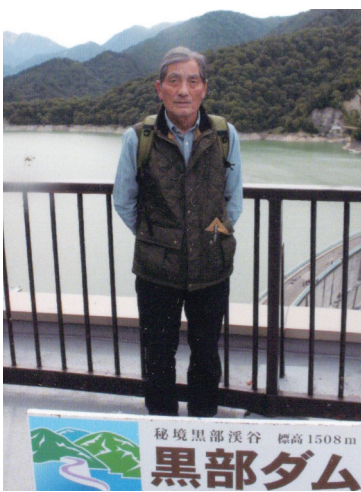
ても、必ずしも、全てを理解しきれない。今回、「文化」「風習」「伝統」という言葉を用いましたが、それは、長い歴史の中で、蓄積され、変容してきた、本来であれば、ひとことでは表現しきれないものなのかもしれません。

参考文献

1. 外務省 インドネシア共和国基礎データ
2. 「地球の歩き方 2015～2016 インドネシア」pp408-415、ダイヤモンド社

新会員紹介

森田仁徳



* 齊藤さんとは S48 年青年団国内研修沖縄以来の付き合いです。

八代の齊藤さんの誘いで、本学会の一員に加えていただくことになりました、熊本市の森田仁徳（モリタ ヒロノリ）と申します。

昭和生まれの今年 70 歳になる、なんの取り柄もない自由人です。日頃は自治会活動と、2 年前から車中泊の一人旅に出かけています。29 年 7 月山口・島根を 6 日間、9 月信州エリアを 10 日間、永平寺・飛騨高山・上高地・黒部ダム・梶池自然園・白駒の池（苔の森）と自然を満喫。去年は 9 月東北エリアを 11 日間、おもに尾瀬ヶ原湿原・日光東照宮・裏磐梯五色沼群・中尊寺・宮古市から海岸沿いの国道 45 号線を南下、各地で震災復興が進んでいます。しかしながら福島第一原発のある双葉町・大熊町は帰宅困難地域のため、人の立ち入りが制限されており、現在も震災当時のままで時間がとまっている町です。自分の目で見て体験することが大事だと感じました。「百聞は一見にしかず」です。

「人生 100 年時代」といわれる中です。健康を維持するためにもやりたいことは前向きにやる気持ちでいます。皆さんと一緒に勉強できることを楽しみにしています。ご指導のほど宜しくお願い致します。

那須良輔没後 30 年

上村雄一



写真 那須良輔の書斎（湯前まんが美術館が那須の資料をもとに再現。同美術館内にある）。

近藤日出造、清水昆と並び称された風刺漫画家。今年2月は没後30年であった。

那須は、大正2（1913年）4月15日に、球磨郡湯前村（現湯前町）で農家の長男として生まれた。幼い頃から絵を描くのが好きで、各種のコンクールで入賞し、洋画家をこころざすようになり、親戚中の反対を押し切って上京。学費や生活費を稼ぐために新聞・雑誌に漫画を投稿し、それが切っ掛けになり、風刺漫画の世界に入った。

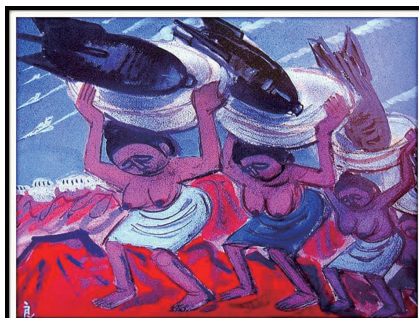
大正2生まれだが、那須は「昭和の時代」に生

きた。彼の基礎力は大正時代に培われたが、それが芽をだしたのは昭和で、戦後になってから、彼の時代ははじまった。平成元年2月22日に世を去った。それゆえ「平成」を知らない。彼は、あくまでも、「昭和」に生き「昭和」を駆け抜けた画家であった。彼についての文献は多数あるが。小論では、自伝『漫画生活50年』（平凡社 1985年）を中心に、彼を紹介する。

職業として風刺漫画家

風刺漫画家は、どういう職業か。画力は絶対的に必要である。しかしそれだけでは足りない。社会・政治の動向を把握し、それをひとひねりして風刺として表現する能力がいる。同時代に生きる読者に「なるほど」と思わせなければならない。彼は、岡本一平らの絵、「今からみたら古臭くみえる」という。それは那須自身にもあてはまるのであって、いまの若者は、おそらく、彼の絵を「古臭い」と感じるだろう。風刺漫画も時代の産物にほかならないのであって、那須もその例外ではない。そのことを前提にしたうえで、風刺漫画家は、つねに政治・社会の動向に敏感でありつつづけなければならない職

写真 那須まんが3枚



業である。政治・社会の動きを知らずして政治漫画は描けない。政治的意見がさまざまに存在するなかで、多くの読者に支持される描き方をしなければならない。那須は、こうしたことを、くりかえし考えつづけた画家であった。彼は、作者であると同時に、理論家であった。くりかえし模索しつづけた作者であった。

戦前

昭和は戦前と戦後に二分される。戦前日本はどのような社会であったか。昭和12年(1937年)に日中戦争が始まるまで日本は「相対的」に平和であった。ジョン・エブリーが「須恵村」を調査(昭和10年—昭和11年)できるほどには「平和」であった。それ以前の昭和8年(1933年)に、瀧川事件が発生し、那須と同じ湯前出身の北御門二郎に大きな衝撃を与えるほどには「緊張」していたけれども、それでもなお「平和」であった。少なくとも「鬼畜米英」の時代ではなかった。もちろん、その「相対的平和」は急速に失われていった。

日中戦争開始直前の昭和12年に、那須は最初の招集令状を受けている。その後、2度召集されることになる。その間の事情は、村木正則「奥多摩 湯前の偉人①」(「月刊 くまがわ春秋」34号73頁以下)による説明のとおりである。している。多くの漫画家と同じく、那須は対敵用の宣伝用のビラ(「伝単」)を作成した。彼は戦争を通じて「人間の愚かさと悲しみをとことん知らされた」といい、

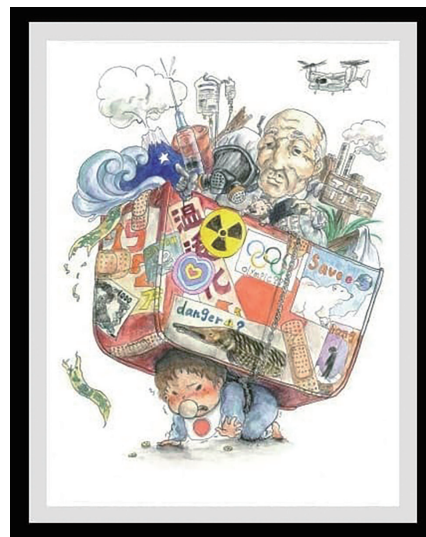
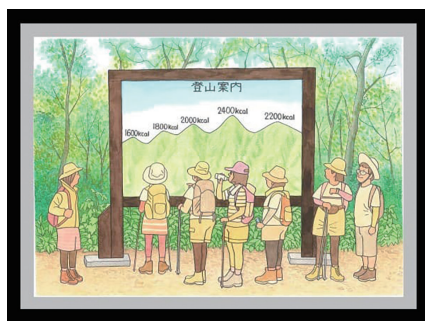
「戦中は政治漫画といえば、戦争協力の作品以外は発表出来なかった。敗戦をむかえてはじめて自由な作品を掛けるようになり、私を含む多くの政治漫画達は翼を得た鳥のように政治風刺の漫画を発表しはじめた」

と述べている。本当の意味の風刺漫画は戦後に始まった。

戦後

「戦後」は長期間を指す。敗戦直後から、朝鮮戦争、

写真 漫画大賞受賞作



講和条約、冷戦、高度成長時代、学生紛争頃など時代は移り変わった。政治漫画家のなかで方向性の違いがでてきた。那須は、

「漫画家自身が、政界説明漫画に興味を失ってきた、といってもよからう。いわゆる（岡本）一平流の、政界人を常にたずね、政治家の裏面までさぐる、という勉強の仕方にギワクが起きた」

といい、さらに、

「政界内部の色々な取り引き、かけ引き、ハッタリ、ラップつき蓄音機とカラーテレビほどのズレがある。そのズレを、どう新しく処理して国民の皆様に見せるかという、政治漫画の表現の苦悩が現れはじめた」

と述べている。風刺漫画史を考えると、那須のこの指摘は重要で、それ自体、検討にあたいする。しかし、ここで、那須が政治問題に関心をもちつづけたこと、特に「沖縄」・「基地問題」を重要なテーマにすることを指摘するにとどめる。

政界の胡散臭さに閉口しつつ、那須は、吉田茂など多数の政治家を似顔絵にした。それは那須漫画の特徴のひとつである。

那須の課題意識

敗戦から40年経過した昭和60年に、今後の課題ともいべき項目を書いた。

第一に、天皇家との間に政治漫画の間には垣があるという。彼は皇太子時代のいまの天皇夫妻を描いているが、それでは足りないと考えた。イギリスのように天皇家を作品の対象にできる状況の実現を求めた。那須にも、皇室を風刺の対象にできない「空気」が日本には存在している。まもなく「平成」は

終わるが、状況は変わっていない。

第二に、政治漫画に対する評価だ。那須は「低すぎる」といい、「狭い檻の中に閉じ込められ、鋭い歯牙をもがれた感じがしてはならない」といい、外国と比較して、政治漫画家が他の絵画・芸術より一段低く評価されているとした。

第三に、国内政治よりも国際的視点の政治漫画がこれからは重要になると展望した。国際社会のネットワークのなかに日本が存在していることを那須は自覚していたのであった。

第四に、「政治漫画」にしる、「社会戯評」にしる、新聞の紙面から姿を消しつつあるのではないか、それは風刺漫画の力を弱めるとした。残念ながら、那須の指摘は着実に進み、多くの新聞は政治漫画・社会儀評的漫画を掲載しなくなった。その理由はどこにあるだろうか。そのことも検討に値する課題であろう。

湯前まんが美術館

新聞の動向とは別に、彼の出生地の湯前町は、那須の遺志をつぎ、まんが美術館を建設し、風刺漫画を募集し、大賞などを発表している。同館設立の経緯については、溝下昌美「湯前美術館 設立の頃」（月刊 くまがわ春秋 15号、18号、19号、20号）を参照されたい。

（うえむら、ゆういち くまがわ春秋編集主幹）



平成 31 年度大会案内 (詳細は別途ご案内します)

平成 31 年度大会は、日本初の大型ダムの撤去現場となった八代市坂本町において開催されます。1 日目の研究発表も地域をテーマにした発表が多く、2 日目の現地見学会では、撤去現場と再生された球磨川の流れ、撤去に伴い営業再開された木造 3 階建て旅館、建設前に賑わっていた古い集落、天照皇大神ほか 4 柱を祭神とする藤本五社神社、坂本町から八代海まで一望できる展望所等、坂本の自然と歴史を巡ります。

開催地：八代市坂本町

日時：平成 31 年 6 月 1 日 (土) ～ 2 日 (日)

▶ 総会

日時 6 月 1 日 (土) 11:00～12:00

会場 坂本町コミュニティセンター 3 階会議室 (肥薩線坂本駅前)

▶ 研究発表会

日時 6 月 1 日 (土) 13:30～17:00 (ポスター発表：12:30～16:00)

会場 坂本町コミュニティセンター 1 階ホール

※終了後懇親会を行います (会場は、築 60 年の木造 3 階建て旅館・鶴之湯旅館です。)

1) 基調講演 13:30～14:30

「坂本の建築物と集落 (仮題)」 森山学 (熊本高等専門学校八代キャンパス)

2) 研究発表 (口頭発表) 14:40～17:00

- ①「紙漉きの里を守る - 宮地和紙と周辺景観の保存」磯田節子 (熊本高等専門学校八代キャンパス)
- ②「荒瀬ダム撤去後の球磨川と河口干潟の変化」つる 詳子 (自然観察指導員熊本県連絡会会長)
- ③「食べて祀って～流域に残る祭りとそのお供え物の意味～」坂本桃子 (はちりゅういずむ)
- ④「製紙工場 - 熊本の近代化」上村雄一 (月刊くまがわ春秋 編集主幹)
- ⑤「隠れ念仏と坂本」山本隆英 (坂本町西福寺住職)
- ⑥調整中

3) 研究発表 (ポスター発表) コアタイム 12:30～13:30

- ①「昭和 40 年 7 月 3 日水害写真から、当時の水害を検証する」つる 詳子
- ②「地上レーザスキャナによる樹高計測のための樹幹形の解析」越河一樹 (熊本県大環境共生)・溝上展也 (九大農)・山本一清 (名大農)・井上昭夫 (熊本県大環境共生)
- ③その他

▶ 現地見学会「坂本町の歴史と文化を辿る」

日時 6 月 2 日 (日)

コース 鶴ノ湯旅館館内見学 → 葉木集落 → 荒瀬ダム撤去サイト → 藤本五社神社 → 坂本駅 → 和鳴 (昼食) → 八竜山展望台 → 道の駅 → 百済来地藏堂 → 鶴ノ湯 (解散)

参加費：2000 円 (昼食代、ガソリン代)

